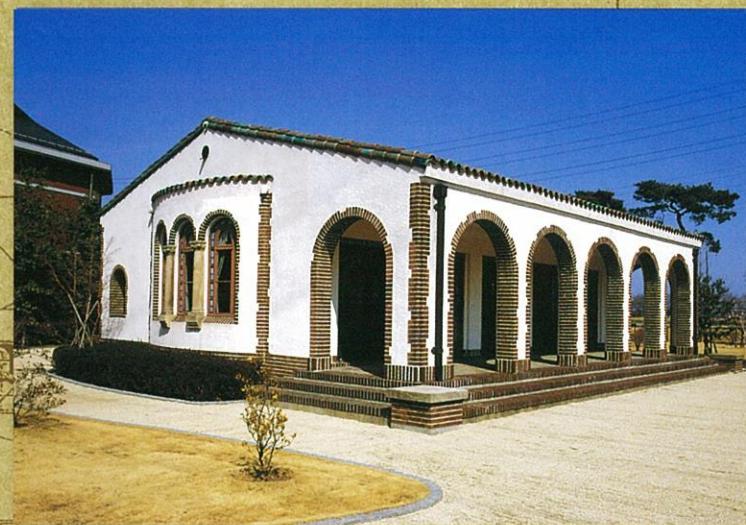


誠之堂・清風亭物語



誠之堂 設計／田辺淳吉
(国指定重要文化財)



清風亭 設計／西村好時
(埼玉県指定有形文化財)



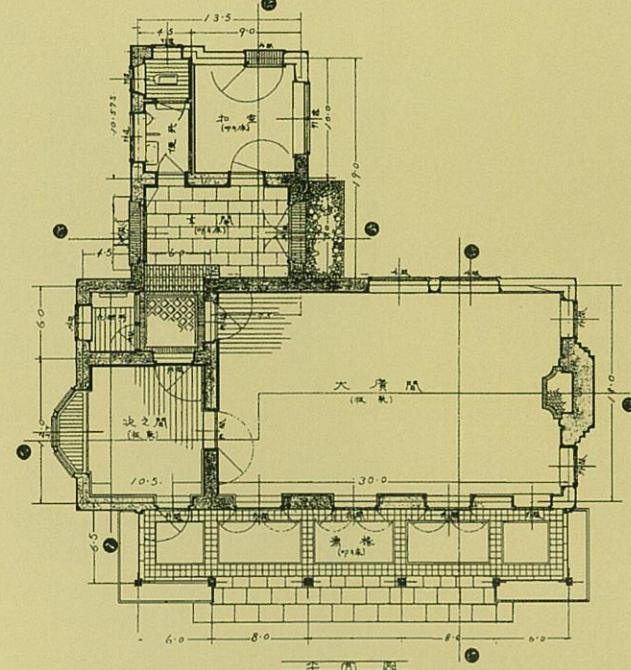
誠之堂内観



清風亭内観

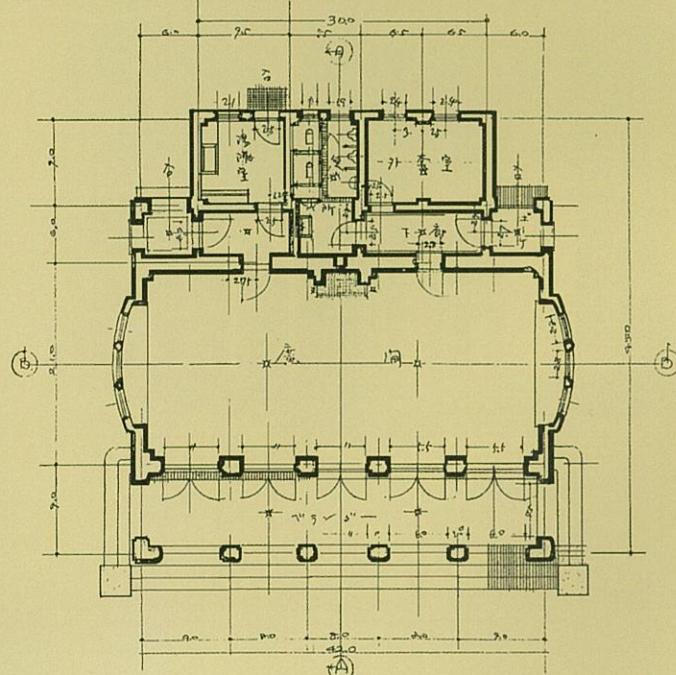
■誠之堂平面図（大正5年作成の原図より）

建築面積 112.30m² 延床面積 93.05m² 建築 大正5年 復原 平成11年



■清風亭平面図（大正15年作成の原図より）

建築面積 168.48m² 延床面積 143.03m² 建築 大正15年 復原 平成11年



■誠之堂点描



■清風亭点描



1. 誠之堂・清風亭物語

誠之堂・清風亭取り壊しの危機

深谷市に誠之堂と清風亭に関する突然の連絡があったのは、平成9年（1997）9月30日でした。両建物の保存運動を進めていた建築の研究家から、電話による悲鳴とも思えるような打診が、深谷市教育委員会に寄せられたのです。その内容は、「渋沢栄一翁の喜寿を記念して建てられた、世田谷区にある誠之堂という貴重な建物が、隣接する清風亭とともに今にも壊されようとしているが、翁生誕地の深谷市で緊急に引き取ることはできないか。」というものでした。



取り壊し工事のためネットが張られた誠之堂

誠之堂と清風亭は、一般には公開されていなかっただけで、関係者以外にはあまり知られていませんでした。そこで市教育委員会は、大至急両建物に関するデータを集め、この二棟の建物が、近代日本を代表する建物として、高く評価されていることを確認しました。

市では翌10月1日に市長と職員が世田谷区に急行して現地の状況を視察しました。

二棟の建物は、たいへん保存状態も良く、風格ある素晴らしい姿をしておりましたが、既に取り壊し工事用のネットに覆われ、5日後には取り壊しを開始するという、まさに切羽詰まった事態となっていることが明らかになりました。

誠之堂・清風亭深谷市へ

渋沢栄一翁の遺徳の顕彰を推進している深谷市としては、今まで残されている渋沢翁ゆかりの数少ない建物、誠之堂と清風亭が取り壊されてしまうのを、このまま見過ごすことはできませんでした。そこで、保存のための最後の手段として、深谷市への移築が大至急検討されることになりました。

この情報に接した市議会議員や教育委員などの深谷市の有識者にも、両建物の移築はたいへん重要な課題であると受け止められました。こうした渋沢翁を誇りとする市民の心を背景として、深谷市は建物を所有していた第一勵業銀行に両建物の移築を強く要望し、着手寸前に解体工事は延期されました。その後、市議会の承認や第一勵業銀行の同意を経て、誠之堂と清風亭は正式に深谷市へ移築保存されることになりました。

なお、誠之堂と清風亭の保存問題は、貴重な建物であるだけに、建築学界からも注目されていました。このため、深谷市への移築保存が決定してからは、日本建築家協会から深谷市への激励書が寄せられたり、雑誌などに研究者の賞賛の声が掲載されたりしました。

誠之堂と清風亭の深谷市への移築保存は、歴史的な建造物を保護するための一つの例として、今後の模範になることでしょう。

誠之堂の生い立ち

誠之堂は、大正5年（1916）に、第一銀行が所有していた「清和園」に、渋沢栄一翁の喜寿を記念して建てられました。第一銀行は、渋沢翁が設立した日本初の銀行、第一国立銀行を受け継いだ銀行です。誠之堂の建築費はすべて銀行関係者有志の寄付によるものであり、銀行の創立者である渋沢翁が、銀行の人々からたいへん慕われていたことがしのばれます。



渋沢栄一

誠之堂の大きさは約112平方メートルで、煉瓦造り平屋建、イギリスの農家風の外観をしています。この煉瓦は、深谷で生産されたものであることがわかっています。なお外壁

には、煉瓦を組み合わせて「喜寿」という文字を表した印象的な部分があります。

広間には煉瓦積みの暖炉があり、威厳に満ちた表情の渋沢翁のブロンズレリーフがはめ込まれています。こうしたデザインの隅々にまで、渋沢翁の好みが反映されているそうです。ちなみに誠之堂という名前も、中国の有名な哲学書「中庸」の一節から、渋沢翁自身が命名したもののです。

設計を担当したのは、当時の第一人者、田辺淳吉です。誠之堂は、田辺の実力が遺憾なく発揮された大正ロマンあふれる名建築とし



大広間にある栄一翁のブロンズレリーフで、現在でも高く評価されています。

誠之堂は、当初は第一銀行関係者のための集会施設として利用されました。その後、建物は銀行が所有し続けましたが、清和園の敷地は私立の学校に売却されました。誠之堂も学校に貸し出され、教師の住宅などに使われたため、一般にはあまり公開されることなく今日に至りました。

このたびの深谷市への移築により誠之堂は、生まれ変わって全く新たな歩みを始めるのです。

佐々木勇之助翁と清風亭

誠之堂と並んで建つ清風亭は、渋沢栄一翁の後を継いで第一銀行の第二代頭取となった、佐々木勇之助翁の古希を記念して、大正15年（1926）に建てられました。佐々木翁は、渋沢翁が第一国立銀行を創立したときに行員となりました。優れた経営能力を發揮して渋沢翁に厚く信頼され、第一国立銀行が第一銀行となつた後、明治39年（1906）には、総支配人に就任しました。これは、多くの企業を指導しなければならなかつた渋沢翁が、佐々木翁に第一銀行の業務を一任するために特別に設けた役職であり、渋沢翁と佐々木翁の絆の強さがうかがわれます。渋



佐々木勇之助

沢翁は大正5年（1916）に頭取を引退し、佐々木翁が第一国立銀行の第二代頭取となりました。

沢翁が「謙徳に富んだかた」と評した佐々木翁は、目立つことを好み地味な性格であったと伝えられ、当初は自身の古希を記念する建物の建設も辞退しようしました。しかし、多くの第一銀行員の熱意により、第一銀行の歴史上沢翁と並ぶ最大の功労者を、記念するにふさわしい素晴らしい建物、清風亭が完成したのです。清風亭は、鉄筋コンクリート造り平屋建、約168平方メートルほどのスペインの小住宅風の建物です。スペイン瓦が葺かれた屋根や、ステンドグラスのある出窓、半円形のアーチが連続したベランダなどがたいへん印象的です。

設計は、銀行建築の名手とうたわれた西村好時ですが、鉄筋コンクリートの建物は、当時はたいへん画期的なものでした。建築の専門家は、日本の初期鉄筋コンクリート建築技法を知ることができるという点でも、清風亭を高く評価しています。

沢栄一翁と第一銀行

沢栄一翁が、明治6年（1873）に明治政府を退官してから最初に行った事業が、第一国立銀行の創立でした。国立という名称でしたが、国営ではなく、沢翁が合本組織と呼んだ、株式組織による民間会社でした。すなわち第一国立銀行は、日本最初の銀行であると同時に、日本最初の株式会社でもあっ

たのです。

ヨーロッパの進んだ経済の仕組みを学び取っていた沢翁は、民間事業を発展させるためには、しっかりとした銀行組織が欠かせないことを深く認識していました。英語のバンクを銀行と訳したのも沢翁だそうです。

第一国立銀行は、設立直後の大株主の倒産という最大の危機を、沢翁らの努力により乗り越えて発展し、その後全国各地に設立された銀行の模範となりました。明治29年（1896）に、普通銀行の第一銀行となりましたが、その際に沢翁は、実務のほとんどを、銀行創立以来苦楽を共にした佐々木勇之助翁に任せました。

第一銀行の生みの親である沢翁と育ての親である佐々木翁が、たいへん深く尊敬されていたことは、沢翁と佐々木翁を記念する誠之堂と清風亭という素晴らしい建物が、第一銀行員の総意により建設されたことが証明しています。

建物の解体を進めるにつれて、知られる建物の構造などが次々に明らかになりました。日本の建築史を考えるうえでの重要な発見も数多く、解体が進むほどに、二棟の建物に対する専門家の評価が、ますます高まりました。

清和園での記念撮影

誠之堂と清風亭が建てられた清和園は、第一銀行が行員の保養のために整備した、運動場のある庭園です。それぞれの建物が建設されたときに、建物を背景に記念写真が撮影されました。

誠之堂の開館式を兼ねた沢栄一翁の喜寿祝賀会は、大正5年（1916）11月12日に帝国ホテルで開催され、徳川慶久公爵（慶

喜公の七男）や穂積陳重男爵（沢翁の娘婿）、沢元治博士（沢翁の甥）など、多くの親戚や関係者が出席しました。第一銀行員の総代として佐々木勇之助翁が祝賀の言葉を朗読し、沢翁が謝辞とともに銀行の歴史を演説しました。午餐会の後、清和園に移って誠之堂で茶菓を楽しみ、記念撮影が行われました。なお、このときに記念植樹された泰山木も、誠之堂とともに深谷市に移されました。



誠之堂前庭での記念撮影

佐々木翁は、大正12年（1923）8月に古希を迎ましたが、9月に関東大震災が発生したため、祝賀会は当初予定から少し延期され、翌年2月12日に帝国ホテルで開催されました。発起人総代は、沢翁の長男、沢篤二氏でした。また、古希記念館である清和亭の建設も大震災のために遅れ、開館式典は大正15年（1926）11月14日に清和園で行われました。そのときには、祝賀の言葉を石井健吾副頭取が朗読し、佐々木翁が謝辞を、沢翁が祝辞を述べました。記念写真には、沢翁や佐々木翁はじめ、篤二氏や後に大蔵大臣などを務めた沢敬三氏（篤二氏の長男）などの人々が撮影されています。

誠之堂と清風亭の記念写真は、いずれもたいへん鮮明な状態であり、貴重な歴史的記録です。

画期的な移築工事

文化財クラスの建物が、別の場所へ移築された例は少なくありませんが、その多くは木造や石造のものです。誠之堂のような、本格的な煉瓦造りの建物の場合、建物全体を移築するのは世界でも初めてだそうです。したがって、建物の解体計画の策定にあたっては、差し迫った状況ではありましたが、慎重な検討が重ねられました。さらに、建物に関する綿密な調査が実施されるとともに、隅々まで詳細な記録が作成されました。



誠之堂の煉瓦外壁の切削作業の様子

建物本体は、煉瓦の一つひとつまで分解してしまいますと、復原が不可能になってしまふため、解体方法はたいへんな難題となりました。結局、極めて高度な切断技術を駆使して幾つかの部分に分解し、復原予定地で組み立てるという方法が採られることになりました。こうした工法は、現時点における最高の技術の粋を集めたものであり、誠之堂の移築工事は、まさに画期的な事業として、建築学界をはじめとする各方面からたいへん注目されています。

清和亭はコンクリート造りの建物であり、コンクリート壁の全てを移すことは不可能な



ため、建物本体をそのまま移築することはできません。しかし、屋根のスペイン瓦やステンドグラスのある出窓、半円形のアーチが連続するベランダなど、最も印象的な部分は、元の部材をほとんどそのまま使用して復原することになりました。



解体中の清風亭の内部。煉瓦がコンクリートの補完材として使用されている様子がわかる。

また、解体作業を進めたところ、コンクリートの壁に煉瓦が埋め込まれて補完されているなど、日本の初期コンクリート建造物の、知られざる構造などが新たに判明し、学術的な観点からも、このたびの移築保存事業の意義が、ますます高く評価されています。

大正モダンの田辺淳吉

誠之堂を設計したのは、大正時代を代表する建築家、田辺淳吉です。大正建築のモダンな潮流を作り上げ、天才と賞賛されました。

田辺は、帝国大学の工科大学建築学科で、東京駅を設計した辰野金吾に学び、卒業後は清水建設株式会社の前身である清水組に入社、次第に頭角を現していました。

明治42年（1909）、渋沢栄一翁を団長として、東京・大阪などの事業家による訪米団が組織され、田辺は清水組の支配人とともに参加しました。訪米団帰国後も、田辺は

単身でアメリカからヨーロッパを巡って研鑽を深め、大きな影響を受けました。

帰国後はさらに名声を高め、大正9年（1920）には独立して建築設計所を開きましたが、その六年後、病を得て四十八歳の若さで亡くなりました。

田辺の代表作には、誠之堂のほか、王子飛鳥山の旧渋沢邸の中に現在も建っている、晩香廬と青淵文庫があります。



晩香廬

晩香廬は、誠之堂と同じく渋沢翁の喜寿のお祝いに、清水組が翁に贈った建物です。木造平屋建ての味わい深い建物であり、渋沢翁は賓客をもてなすために好んで使ったそうです。

青淵文庫は、渋沢翁の八十歳と男爵から子爵への昇格を祝って、竜門社が翁に贈った、鉄筋コンクリート造り平屋建ての建物です。ステンドグラスやタイルなどの美しい装飾が施されています。

誠之堂、晩香廬、青淵文庫は、それぞれ異なる建築方法により建てられた田辺の傑作であり、この三棟が飛鳥山旧渋沢邸と翁生誕地の深谷に保存されるのは、渋沢翁顕彰や建築史研究のうえで、たいへん意義深いことと言えます。

銀行建築の西村好時

清風亭は、銀行建築のスペシャリストとして名を馳せた西村好時が設計しました。

西村は、明治45年（1912）東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、大正3年（1914）には清水組に入社、誠之堂を設計した田辺淳吉の片腕となつて活躍しました。

大正9年（1920）、清水組の推薦により、銀行建築の専門家として第一銀行の技師・建築課長に抜擢されました。そして主要な支店を次々と設計し、欧米視察などの成果を生かして、昭和5年（1930）には東京の丸の内に本店を建設しました。渋沢栄一翁は、自らが手塩にかけて育て上げた第一銀行の本店が、西村の設計により竣工したのを見届けて、翌昭和6年（1931）に他界しました。なお、建築部長として本店工事の指揮にあたったのは、渋沢の後継者である、孫の渋沢敬三でした。

西村は、銀行建築だけでなく、邸宅の設計も得意にしていました。昭和6年（1931）に東京の三田に建てられ、現在青森県三沢市の渋沢公園に移築されている旧渋沢邸も、西村が設計したものでした。温厚で誠実な人柄の西村は、渋沢家からたいへん厚く信頼されました。渋沢敬三は、西村の設計を高く評価しており、昭和25年（1950）に刊行された西村の作品譜の序文の中で、「実用建築家として非凡な能力を発揮されました」という賛辞を贈っています。

清風亭は、小さいながらも銀行建築で見せた洋風の感覚と、邸宅建築の落ち着いた手法が駆使されており、西村の代表作と呼ぶにふさわしい建物です。

深谷の煉瓦の建築物

誠之堂の解体工事が始まる間もなく、表面に「上敷免製」（下写真参照）と刻印されている煉瓦が見つかりました。誠之堂の煉瓦は、深谷から運ばれたということが言い伝えられていましたが、これで深谷製であることがはっきりと証明されました。



深谷の煉瓦で、日本近代の代表的な建造物が建設されたことはよく知られています。

現存するものだけでも、東京駅、法務省旧本館、迎賓館（旧赤坂離宮）、日本銀行旧館、旧信越線碓氷第三橋梁など、日本近代を支えた名建築が数多く挙げられます。このうち、迎賓館などの石造のように見える建物は、煉瓦建築の表面に石材が張られたものです。清風亭が、煉瓦とコンクリートを組み合わせた造りであることが思い起こされます。

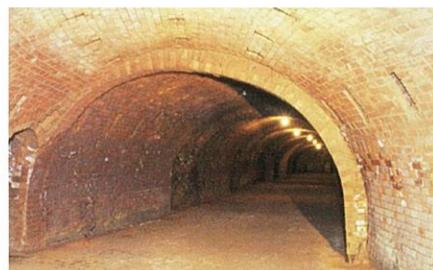
深谷市内にも、重要文化財となったホフマン輪窯のほか、旧深谷町内などに煉瓦建物が残されています。これらの多くは明治の後半から昭和の初め頃に建てられたもので、深谷にも盛んに煉瓦建物がつくられていた古き良き時代がしのばれます。

昭和60年（1985）に横浜開港資料館で開催された「日本赤煉瓦展」で、「日本赤煉瓦番付」が発表されました。これは、日本近代建築研究の権威、東京大学の藤森照信教授を中心に作成されたのですが、番付の東、すなわち東日本の横綱には東京駅が、大関には法務省が選ばれています。こうした大建築

に混じって誠之堂も、堂々と前頭に登場しています。この番付は、深谷製の煉瓦でつくられた建物が、たいへん重要なものであることを証明しています。

渋沢栄一翁の顕彰と レンガを活かしたまちづくり

渋沢翁は、歐米を模範とした近代的な都市計画を進めるためには、建築資材として煉瓦がたいへん重要であると考えていました。そして生まれ故郷の深谷の土が煉瓦生産に適していることに着目し、日本初の機械式煉瓦工場を現在の深谷市上敷免に設立したのです。工場に今も保存されているホフマン輪窯6号窯などが、日本の近代化を支えた貴重な歴史的遺産として、平成9年（1997）に国の重要文化財に指定されました。



ホフマン輪窯6号窯

深谷市はこうした歴史を踏まえ、個性的かつ魅力的なまちづくりを推進するために、現在「渋沢栄一翁の顕彰とレンガを活かしたまちづくり」に取り組んでいます。具体的には、公共施設に煉瓦を活用したり、「深谷市レンガのまちづくり条例」を制定して一般の煉瓦あるいは煉瓦調タイルの建造物の増加を推進しています。平成6年（1994）には、地域の特性を活かしたまちづくりに大きな効果を上げているとして、埼玉県主催の「ふるさ

と彩の国づくりモデル賞」を受賞しました。

煉瓦造りの誠之堂は、渋沢翁との由緒も深く、このユニークなまちづくりのシンボルとなりました。また、誠之堂と清風亭が復原された大寄公民館は、位置的にも渋沢翁の生地とホフマン輪窯のほぼ中間になり、この3ヶ所を結ぶルートは、近代日本の歴史を探る格好の散策コースとなります。

これから物語

誠之堂・清風亭は、その風格ある姿を再び現しました。一時は風前の灯となっていた二棟の記念碑的な建物は、渋沢栄一翁の生誕地であるここ深谷市で、新たな歴史を歩み始めることになりました。

二棟の建物は、渋沢栄一翁との由緒が深いばかりでなく、近代日本建築史を飾る、極めて文化的価値の高い建物です。しかし、博物館の展示物などのような、触ることもできない特別な宝物ではなく、地域の中に生きる施設として生まれ変わりました。建物は、たとえ文化財などであっても、使用しなければ早く傷んでしまうだけでなく、その価値も半減してしまいます。人々に利用され、地域の中に溶け込んでこそ、その存在意義があります高まるのです。

平成11年11月、両建物を「誠之堂・清風亭」という公の施設として設置しました。広く一般に公開するとともに、文化やコミュニティ活動の向上などの目的に利用され、市民の皆さんに深く親しまれています。

平成15年5月、誠之堂は、国の重要文化財に指定されました。また、平成16年3月、清風亭は、埼玉県指定有形文化財に指定されました。

2. 誠之堂・清風亭移築復原工事の概要

誠之堂・清風亭の移築復原工事は文化財的価値を損なわないことを前提として、綿密な計画のもとに行われました。

解体工事 平成10年2月～6月

復原工事 平成10年8月～平成11年8月

部位別復原工事の方針

I. 誠之堂

●外壁煉瓦

- ・外壁煉瓦の意匠・材料を忠実に移築復原。
- ・搬送可能な大きさに分割して移設（日本初の工法）。
- ・煉瓦の損傷部分については、基礎、床束、ガリょう等、構造変更のある部分から転用。
- ・基礎は鉄筋コンクリート造に変更。
- ・煉瓦壁頂部にガリょうを設置。



切断された誠之堂の煉瓦外壁



■解説

煉瓦外壁を基礎に備え付ける工事の様子。重さ約20トンの切断された煉瓦ブロックをクレーンで引き上げmm単位の精度で積み上げていく、非常に高度な技術を駆使した工事です。



■解説

積み上げられた煉瓦を固定するために、コンクリートのガリょうを巡らせた。ガリょう上部から煉瓦壁を通じ基礎までP-C鋼棒を貫通させてボルトで締め付け、煉瓦壁体を固定した。

●屋根

- ・屋根スレートは錆びた釘等を撤去し、一枚ずつ取り外し移設。
- ・破損している部分については、類似したストレートを同形状に成型し、補足。
- ・煉瓦の割れているものは、できる限り裏面より補強し、再利用。又、欠落しているものは新規に作成して補足。
- ・屋根窓、奥突、煙突は原状のまま移設。但し煙突は構造補強を施す。
- ・風見鶏は原資料を基に新規再現。
- ・小屋組架構はあわらしで移設。



組立途中の小屋組架構



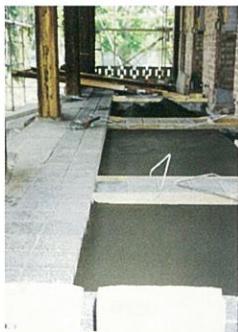
一枚ずつ張っていくスレート瓦



ほぼ組み立てが終わった煉瓦壁

●濡縁

- 原状のまま移設。軸部全体、軒裏、軒先、破風などについては再利用。
- ベンチは再利用。不足分は新規材（同材）で補足。
- 洗い出し床については、一部再利用。他の部分は目視で仕様を調査し、同仕様で新規再現。下地（構造体）はコンクリート造に変更



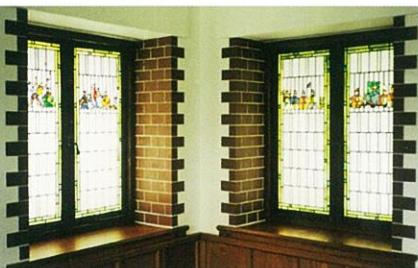
- ステップは現状のまま移設。下地（構造体）はコンクリート造に変更

■解説

再利用された洗い出し床。コンクリートの部分は新規に再現する部分。

●建具、建具枠、木部

- 現状のまま移設。既に失われた建具は復原資料を基に新設。
- 破損部分等については、剥ぎ木・補充色合わせを施す。

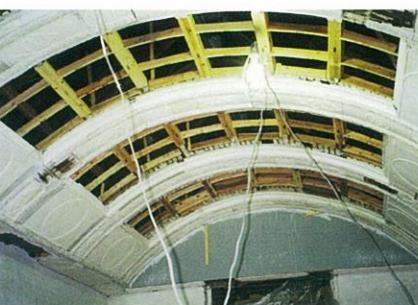


■解説

誠之堂のステンドグラス。漢代の庶民貴人を譽する図を模したもの。森谷延雄の図案により作製された。

●大広間

- 床、暖炉廻り、天井リーフは現状のまま移設
- 壁のうち漆喰壁以外は現状のまま移設
- シャンデリア、じゅうたん及び家具については、原資料を参考にして復原



据え付けられた漆喰天井

II. 清風亭

●外壁

- 鉄筋コンクリート造に新規再現
- 出窓及びベランダ部分は部分移築
- スクラッチ煉瓦は新規再現



鉄筋コンクリートの躯体と部分移築された出窓

●屋根

- 屋根瓦（スペイン瓦）は移設
- 欠損、破損部分は新規作製し、補足
- 割れているものは、できる限り裏面より補強して再利用



一枚ずつ張っていくスペイン瓦

●広間出窓及び建具

- 出窓周囲約300mmの部分で切り離し、現状のまま移設。新規のコンクリート壁に打ち込んで取り付け
- 建具は建具枠と共に現状のまま移築



切断され取り外された出窓（解体工事）



切断されたベランダアーチ（解体工事）



基礎に据え付けられた出窓部分

●ベランダ

- 外壁及び屋根部分をカットし、アーチの部分を分割して移設
- 天井については新規再現
- 床ステップ、両脇の石台（多湖石）は煉瓦の台座共移設



据えつけられる前のベランダアーチ



据えつけられたベランダアーチ



煙突取り付け工事の様子



移設されたベランダ及び出窓と新規再現された外壁

●広間

- ・床及び巾木は現状のまま移設
- ・壁は新規再現、開口部のスクラッチタイルは新規再現
- ・天井のレリーフ部分は現状のまま移設。平部分はプラスチックボード下地薄塗プラスチックに変更。
- ・暖炉は大ばらしで現状のまま移設



移設された天井レリーフ



据えつけられた暖炉



復原工事途中の清風亭内部

誠之堂・清風亭のご案内



■お問い合わせ先

深谷市教育委員会

文化振興課 電話 048-577-4501

大寄公民館 電話 048-571-0341

■利用のご案内

開館時間 午前9時～午後10時（ただし、見学は午後5時まで）

休館日 12月29日～1月3日

■交通のご案内

関越自動車道「花園インター」より30分

JR高崎線「深谷駅」下車タクシーで15分

編集／深谷市教育委員会

平成11年11月11日 初版発行／平成16年11月11日 第2次改訂版発行